



J A F S 会員の酒井伸雄さんは、南インドの子どもたちを支援するボランティア活動のため、たびたび同地を自主的に訪れています。酒井さんがインターネットのブログ (<http://yogananda.cc/2019/03/23/sb/>) に発表した現地レポートを、要約して紹介します。

## 南インド支援地訪問記

インド最南端タミルナド州を訪ねるのは今回で8回目、同州にはJ A F Sの支援団体があり、このたび初めてそこを訪問させていただきました。S S H (Society for Serving Humanity) という団体で、貧困家庭やH I Vに感染した子どもたちの支援、女性の経済的自立・地位向上のための活動をしています。

幸い懇意にしているインド人スシルが田舎に帰省する予定があるとのこと、彼の車でS S Hまで送ってもらいました。3月23日、S S Hに到着すると、支援を受けている子どもや女性たちが大歓迎してくれました。写真右。子どもや女性たちが自身の置かれている現状を一人ずつ説明してくれました。子どもたちの多くは片親か両親を亡くし、そして驚くことに、その半数以上がH I V / A I D Sに感染しているのです。H I Vは根本的治療法のない病です。できるのはエイズとなって発症するのを防ぐことだけです。インドの子どもたちは限りなく明る

## 天使の笑顔、HIVの子どもたち

く素直で可愛らしく、H I Vに感染した子どもたちもまったく変わることはありません。感染はすべて両親からであり、エイズ発症まではほぼ元気です。子どもたちがこんなに深い苦しみを抱えているなんて、過酷な現実に胸が押しつぶされそうになりました。子どもたちは自分たちの村にいて生活や学業、食糧の支援を受けています。今日は私の歓迎のため、わざわざ母親や祖母とともに集まってくれたのです。バスを3つ乗り継ぎ3時間半かけて来てくれた子どももいました。ほとんどは貧しい村の出身でカースト最下層であるダリット(不可触民)で、親御さんの中には体調を崩し、働くことのできない人もいます。子どもたちが当たり前の日常を過ごし、学校に通って知識や技術を身に付けるには資金、援助が必要であり、S S Hはそれを助ける活動を行っています。

子どもたちの中には医者や看護師になりたいと具体的志望を語る子もいて、そのために進む上級学校の学資の必要額も教えてくれました。年間1万5千円、約2万5千円で、日本人が少し贅沢を我慢すれば決して払えない額ではありません。『うばい合えば足らぬわけ合えばあまる』、この言葉を心の底から囁みしました。

S S Hの活動は1988年から続いていて、援助を受け学校を卒業した大きな子どもも来てくれました。彼らはハイ

スクールを卒業してエンジニアになったり、さらにディプロマという専門技術を学ぶ上の学校に通っています。たまたま縁あってインドと深い関係を持ち、たまたま縁あってアジア協会アジア友の会を知り、たまたま縁あって日本語が堪能で正義感の人一倍強いスシルと懇意になり、たまたま縁あってスシルの帰省に便乗してS S Hまで連れてきてもらい、彼に通訳とインドの現状についての解説をしてもらい、すべては必然によって導かれた何かだと思わずにはいられません。今を懸命に生きる子どもたちから、自分も真摯な生き方を強く求められていることを感じました。

女の子の一人がアクセサリーを作つて生計を成り立たせていて、そのいくつかをお土産として買いました。日本から持ってきたぬいぐるみやお菓子も配りました。みんな素晴らしい笑顔をしていて、この子たちからとてつもなく大きなものをもらいました。

ある10歳の女の子はお米や穀物、豆などが入った食料支援物資とぬいぐるみを手にして大喜びしています。彼女の微笑みは天使そのものですが、肉體は病に蝕まれています。こんな穢れなき存在が…。

真の穢れとは、肉體や形あるもの存在するのではなく、目に見えない心のあり方に存在するのでしょうか。この後、子どもたちの村へ向かいま

## 学び・自立めざす熱意 かなえてあげたい

した。最初はハイスクール11年生の17歳の女の子の家にきました。お父さんは亡くなり、お母さんと弟と生活しS S Hから生活物資や学資のサポートを受けています。家は、頭を低くして入らなくてはなりません。写真左。屋根は瓦を並べただけで、激しい雨漏りがし、地面むき出しの床はびしょ濡れになるそうです。彼女も上の学校へと進みたいものの、クーリー(農作業などの手伝い)をしているお母さんの収入では難しいと語っていました。

次の家庭も2人姉弟、両親はおらずおばあさんと暮らしています。私にできるのはただ話を聞いてあげ、そしてお菓子や風船をプレゼントし、ハグしてあげることぐらいです。

最後は女性の自立支援活動をしている村に行き、女性グループから話を聴きました。インドでは女性の地位が低く、経済的にも自立困難で、S S Hはそこから脱するための起業支援や職業訓練などを行っています。近年日本では男女が同じ権利を有し、いずれインドもそうなるでしょうと語ると、とても喜んでくださいました。

今日はもう胸に抱えられる許容量の何倍もをみんなからいただき、使命感と責任感の重さをひしひしと感じます。今日は生涯忘れられない一日であり、今の思いを大切に、今自分のできることから始めて行きます。ただそれだけであり、それがすべてです。